

東ブータンの生業とその変遷、そして今後の行方

赤松 芳郎 氏
(京都大学 東南アジア研究所)

中尾佐助がブータンを“最後の秘境”と記したのは、ウマの背に揺られながら入国を果たした1958年のことであった(『秘境ブータン』(1959))。以降、現在までに半世紀以上が経過したが、多様な自然環境と民族を内包するこのヒマラヤの小国家において、人々がどのような生業を営んできたかということは未だ十分に明らかにされていない。一方で、他のヒマラヤ諸国と同様に近代化、都市化はブータンでも着実に進行しており、生業や農村の様相はこの半世紀の間に大きな変容を遂げてきている。本発表では、東ブータンに居住するツァングラ族(Tshangla)とブロッパ族(Brokpa)の幾つかの集落を事例とし、異なる地域や高度帯において営まれていた嘗ての生業を報告するとともに、広域にわたって展開されてきた交易ネットワークや社会環境を通して東ブータンの生業像を捉えることを試みる。また、現在までの生業の変遷とともに、近年、特に東ブータンの多くの村々で顕在化している人口流出や耕作放棄地の増加といった現状を報告し、東ブータンの今後の生業や農村の展望について考えていきたい。

日時

2016年6月24日(金)
16:00～18:00

場所

京都大学本部キャンパス
総合研究2号館4階 大会議室(AA447)



参加費・事前登録は**不要**です。
皆様、奮ってご参加下さい。
また、会后には懇親会を予定しております。

<お問い合わせ先>

小坂：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
kosaka[at]asafas.kyoto-u.ac.jp
柳澤：京都大学地域研究統合情報センター
masa[at]cias.kyoto-u.ac.jp

